

## 破裂性腹部大動脈瘤に対するステントグラフトによる血管内治療の臨床成績

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-12-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遊佐, 裕明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.20780/00032599">https://doi.org/10.20780/00032599</a>

## 主論文の要約

破裂性腹部大動脈瘤に対するステントグラフトによる血管内治療の臨床成績

東京女子医科大学 心臓血管外科学教室

(指導：山崎 健二 教授)

遊佐 裕明

東京女子医科大学雑誌 第 87 巻 122 頁から 127 頁 (平成 29 年 8 月発刊) に掲載

### 【目的】

破裂性腹部大動脈瘤に対してステントグラフトを用いた緊急血管内治療を行った症例の早期治療成績について検討を行った。

### 【対象と方法】

2012 年 1 月から 2017 年 3 月の間に当院で破裂性腹部大動脈瘤に対して緊急血管内治療を施行した 25 例を対象とした。男女比は男性 16 例、女性 9 例であった。平均年齢は  $76.4 \pm 9.6$  歳であった。術前に血圧 70mmHg 以下のショックバイタルの状態であった症例を 6 例に認めた。出血のコントロールのために大動脈閉塞用バルーンを挿入した症例は 2 例であった。全例、術前に CT による画像診断評価を行った。CT 上、平均大動脈中枢ネック径は  $23.0 \pm 3.8$ mm、ネック長は  $22.5 \pm 17.8$ mm であった。平均大動脈瘤径は  $71.4 \pm 11.4$ mm であった。

### 【結果】

術中死亡率は 0% であった。早期死亡は 2 例 (8%) に認めた。技術的な手術成功率は 96% であった。開腹による人工血管置換術に手術に移行した症例は 1 例も認めなかった。術後腹部コンパートメント症候群を合併し、開腹減圧術を施行した症例を 2 例に認めた。術後に施行した CT 検査ではエンドリークを認めた症例

は 1 例であった。

### 【考察】

破裂性腹部大動脈瘤に対しては近年、ステントグラフトを使用した血管内治療 (endovascular aortic repair: EVAR) を選択されつつあるが、その治療に対する有効性に関しては依然議論のあるところである。当院における破裂性腹部大動脈瘤に対する EVAR の早期成績は術中死亡 0%、病院死亡 8% と過去の報告と比較して良好な結果であった。破裂性腹部大動脈瘤の治療においては外科医をはじめ、麻酔科医、各医療スタッフが連携し、循環動態の安定化に努め、迅速に手術室に入室させ、治療を行えるような体制を構築することが、手術成績の向上に重要であり、当院における破裂このような治療に対する取り組みが、本稿の治療成績に反映されたと考えている。破裂性腹部大動脈瘤術後に生じる重篤な合併症の一つとされるのが Abdominal Compartment Syndrome (ACS) である。ACS に対する治療は人工呼吸による呼吸管理、カテコラミンの使用による循環管理、透析などの集学的治療のほかに、腹腔内の減圧を目的として試験開腹術を行うことが必要とされる。ACS の予後悪化の因子としては術前の腹腔内出血の範囲も関与していることから、術前の出血コントロールにも十分配慮する必要性があると考えられた。

### 【結論】

破裂性腹部大動脈瘤に対する緊急 EVAR の早期成績は良好で、満足すべきものであった。開腹による人工血管置換術と比較し、今後、EVAR が破裂性腹部大動脈瘤の治療の第一選択として非常に有効である可能性が示唆された。